

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520676

研究課題名(和文) 英語非対格動詞の習得過程の解明とその能力記述文の作成

研究課題名(英文) The acquisition of English unaccusative verbs and can-do statements of the verbs

研究代表者

佐藤 恭子 (Sato, Yasuko)

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：30205976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者による自動詞(非能格動詞及び非対格動詞)の項構造の習得の過程を実証的に明らかにした。まず、基礎的英文法能力の調査を行い、文法事項の項目別調査を行い潜在ランク理論による分析を行った。これを基に非対格動詞についてこれまで先行研究で報告されてきた受動文の誤用について、認知的な観点から検証を行った。その結果、用いられる文脈として使役主が想定される外発的な文脈や、出来事に対する使役主の直性生の観点が、学習者の受動文の誤用に関係していることが分かった。これらの結果に基づいて、5つの習得段階があることを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the acquisition of unaccusative verbs by Japanese learners of English. To investigate the actual state of the acquisition of English grammar, we gave a grammar test to the learners and analyzed the data by the latent rank theory. The results indicated that the learners were divided into 4 groups and the learners in lower ranks have not had enough knowledge of English grammar. Based on the results, we conducted the experiments of unaccusative verbs and found that the learners had more difficulty in unaccusative verbs when used in externally caused events than internally caused events and there were differences in difficulty among groups of unaccusative verbs and lexical items. By examining learners' errors from a cognitive point of view, we proposed that there are five stages of the acquisition of unaccusative verbs by Japanese learners of English.

研究分野：第二言語習得

キーワード：非対格動詞 項構造 第二言語習得 能力記述文

1. 研究開始当初の背景

伝統的に、自動詞は他動詞と異なり目的語を取らないとされているが、生成文法においては、自動詞の中にもD構造において目的語を有するものがあるという考え方がある。これは「非対格性の仮説」と呼ばれ、その仮説によれば自動詞は非能格動詞と非対格動詞に大別される。先行研究 (Balcom 1997; Hirakawa 2000; Oshita 1997, 2000, 2001; Yamakawa et al. 2008; Yip 1995; Zobl 1989) により (1)学習者が2つの自動詞を区別している、(2)非対格動詞の方が非能格動詞より習得が困難である、(3)学習者の誤用に「受身文の過剰一般化」が観察されることが分かった。(3)の誤用の原因に対しては、これまで 統語的観点からの説明 (e.g. Hirakawa 2000, Oshita 2000)と 認知的観点からの説明 (e.g. Ju 2000, Kondo 2005)がある。しかしながら、本研究の目的である習得の過程について考察したものは、まだOshita(2001)に見られる程度でほとんど行われていない。またこの仮説に対する検証もDeguchi & Oshita(2004)やYamakawa et al.(2008)が行ってはいるが、まだ十分ではなく、習得の道筋の解明については課題が多く残っていると考えられる。

佐藤はこれまでに非対格動詞の習得について、特に自・他動詞の両方の機能を持つ非対格動詞に焦点を当て考察を行ってきた。その結果、日本人英語学習者は、母語の自他の交替を示す接辞の存在に影響され、自他交替を示すマーカーを持たない英語の非対格動詞について、特にS-V構文に困難を感じていることが分かった。そして先行研究の誤用のパターンが中級、上級学習者にも多く観察された。こうした研究結果からS-V構文という一見容易に見える自動詞構文が、何故このように習得が困難なのかを解明するには、できるだけ幅広い英語力を有する学習者を対象に、その習得の道筋を観察する必要がある。特にOshita(2001)では、非能格動詞と自動詞用法のみの非対格動詞を扱っているが、これら2つのタイプの中に、自他両方の用法を持つ非対格動詞のグループも実験対象に含める必要がある。

2. 研究の目的

本研究では主として、非対格動詞の習得上の問題点を、受身文の過剰一般化という学習者に多く見られる誤用を中心に、認知的観点から実証的に検証し、学習者の習得過程のプロセスを示すことを目的とした。その際に、先行研究に見られる実験デザインの課題を改善し、習得の発達段階をできるだけ正確に分析・記述することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 英語文法能力の習得実態調査を行

い、潜在ランク理論を用いて、能力記述文の作成を行った。まず予備調査として *Basic Grammar in Use* (Third Edition) の Evaluation Test を用いて調査を行った。調査項目は全部で 50 項目で、大学1年生 19 名に対して実施した (予備調査)。さらにこの結果を基にして、同様のテストを用いて 99 名を調査対象として、行った (調査 2)。そして本調査では、217 名の学生を対象に、潜在ランク理論を用いて分析を行った。その結果、学生を 4 つのランクに分け、正答率により 4 つのレベル分けを行い、レベル毎の習得状況の把握を行った。

(2) 非対格動詞の習得状況の解明を実験によって検証した。予備調査を基に、文脈における使役主と受身文の容認度の関係を、Ju(2000)の追実験を基に行い、日本人英語学習者に同様の結果が示されるかどうかを検証した。そして受身文を誤って選択する誤用の程度が、非対格動詞の種類、語彙、学習者のレベルによりどのように違うのか、その習得の過程を考察した。

4. 研究成果

(1) 英語文法能力の習得実態調査
予備調査

この調査から、同じ文法項目においても難易度の異なるものがあることが分かった。例えば原級、比較級、最上級の項目では、most を用いた表現 (正答率 100%) や原級を用いる表現 (正答率 90%) は問題が無いと言えるが、数詞を用いた比較級 (two years older than me : 正答率 58%) や不規則形 (farther : 正答率 21%) が難しいという結果となった。そしてこの結果を能力記述文 (can-do statements) で表した。一例を次の表 1 に挙げる。

表 1 原級、比較級、最上級の能力記述文

レベル 1	最上級を表すのに the most + 形容詞を用いて表現できる。
レベル 2	程度の違いを表すのに not as...as を用いて表現できる。
レベル 3	比較級、最上級を -er, -est 以外の不規則な形で表現できる。
レベル 4	比較級を表すのに数を表す言葉と一緒に用いることが出来る。

調査 2

調査の結果、予備調査と同様に、同じ文法範疇に属する項目間で、正答率に差が見られた。具体的には、比較級の程度を強調する much の使い方、否定疑問文、現在完了、願望を表す would like to のフレーズとしての定着度、助動詞 might、have to、不

可算名詞、限定詞、現在完了と過去の区別、代名詞等十分に習得されていないことが分かった。こうした点を「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の観点から考えてみると、CEFR で提示された各レベル (A1 から C1) において中核となる文法事項をまとめたものとして、*Core Inventory for General English*がある。CEFR に合わせて作成された文法事項の配列案では、今回の調査項目は、ほぼ最初の A1 と A2 のレベルに当てはまる。しかしながら、今回の調査では、そのうちの多くの項目において正しく理解していなかったことが分かった。そのため、これらのレベルをさらに細分化して表示する必要があると思われる。

本調査

対象を217名として、調査を行った。潜在ランク理論に基づいた分析を行い、項目参照プロファイルを作成した。その結果、4つの潜在ランクに分けることができ、それぞれのランクの人数は、53人、58人、56人、50人となり、文法項目の平均点に従って、平均点が8.0以上の項目、0.6から0.8の項目、0.4から0.6の項目、0.4以下の項目と分類した。そして各ランクごとの発達上の特徴を観察した。その結果、ランク1の学習者は問題の半数以上について正答率が0.4以下となった。ランク2の学習者は平均点が0.8以上の項目は一つのみで、0.4から0.6の項目が最も多くなった。ランク3の学習者は0.6以上の項目が増えてきているが、それ以下の項目もまだ多く残った。ランク4の学習者になるとほとんどが0.6以上の項目となった。ただし0.4以下の項目も3つ残った。

(2) 非対格動詞の実験調査

予備実験

この実験では、使役者の存在を示す文脈として示された絵の有無と受動文の容認度との関係を、非対格動詞、非能格動詞について、それぞれ自動詞文と受動文の形式で、中位、下位それぞれ19名の実験参加者に対して調べた。その結果、学習者は文脈に関わらず非対格動詞の受動文を容認しにくい傾向が、特に下位レベルの学習者に見られた。また非能格動詞よりも、非対格動詞の受動文を誤って容認しやすい傾向が下位レベルの学習者に見られたが、語彙的な問題も含まれていることが明らかとなった。この語彙的な問題は非対格動詞についても見られた。

本実験

予備実験を基に、この実験では Ju(2000)の追実験として、非対格動詞の受動文の誤用についての検証を日本人学習者60名に対して行い、非対格動詞の受動文の容認度が文脈(外発、内発的文脈)によりどの程

度異なるかを検証した。その結果、受身文を容認する際には、文脈の影響が見られることが分かり、使役主(原因)が想定される外発的文脈では、学習者は受動文を選びやすい傾向があることが分かった。また非対格動詞のうち、学習者は、自動詞のみのグループの場合に、外発的文脈において受動文が多く選ぶ傾向があることが分かった。また語彙別分析を行った結果、受身が選ばれにくい語彙は、学習者全体平均で、turn (18.75%), change (15.63%), grow (15.63%), decrease (12.50%), sink (6.25%)の順となった。この結果は、Ju (2000)とほぼ一致した。学習者のレベルの違いは表れなかった。全体の結果を表2に示す。

表2 全体結果

動詞	文脈	文の数	平均誤答		誤答%	
			上位	下位	上位	下位
自他	外発	13	4.43	4.93	34.08	37.92
自他	内発	13	1.75	2.38	13.46	18.31
自	外発	5	2.31	2.38	46.20	47.60
自	内発	5	0.87	1.03	17.40	20.60

動詞グループ別の結果を図1、図2に示す。

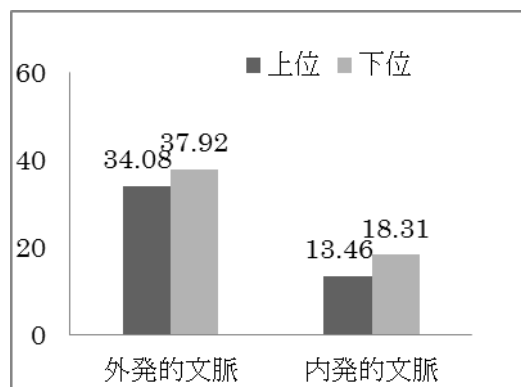


図1 文脈別、学習者別受身文選択率(%) (自他両用)

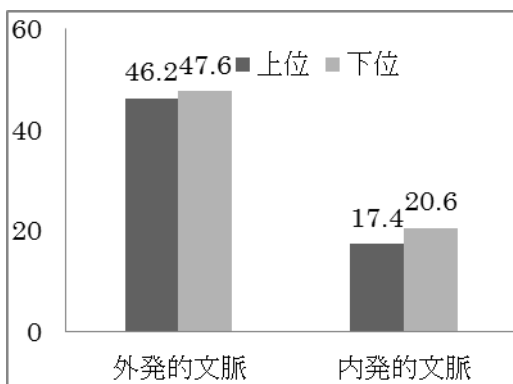


図2 文脈別、学習者別受身文選択率 (%) (自動詞)

語彙別の結果を学習者のレベル別に、以下図3、4に示す。

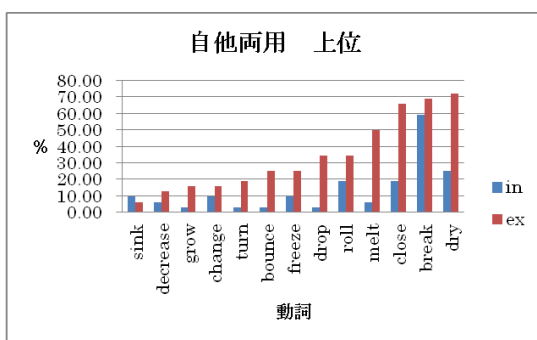


図3 語彙別分析：受身文を選んだ人数・% (語彙別) 上位 (自他両用)

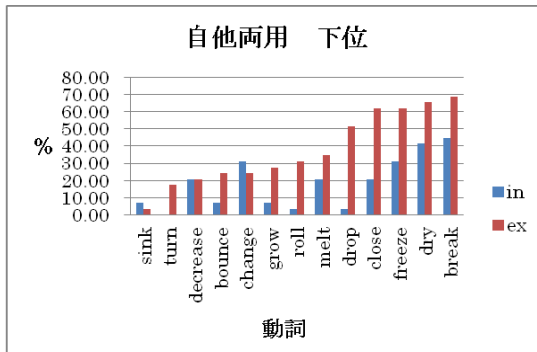


図4 語彙別分析：受身文を選んだ人数・% (語彙別) 下位 (自他両用)

この語彙別の結果の原因として、grow等の動詞の意味する内容を考えると、「原因(使役主)」と「結果」との直接性がそれ以外の語彙、例えばclose, break等に比べると弱いと解釈した。実際、break, close, dryの受身文は上位学習者、下位学習者共に選ばれやすい傾向を示した。またこの結果は先行研究の結果とも一致した。今回の実験から得られた結果は、Ju(2000)の主張する使役主とその行為に対する「直接性」の関係を裏付けるであると結論づけた。

以上から、学習者はこれまでの先行研究と示されているように、自動詞の下位分類の非対格動詞と非能格動詞を区別していること、そして非対格動詞については自動詞を避け、

その受動文を正しい文であると判断する傾向があることが分かった。

またその受動文の誤用の原因として、認知的観点から使役主の文脈の影響を検証したが、非対格動詞のうち、自動詞のみの用法のグループと自他両用の用法のグループでは、前者のグループの方が、文脈の影響を受けやすいことが判明した。さらに、自他両用のグループにおいては、語彙間で違いが現れた。その要因としては、出来事が引き起こされる際の直接性の程度という観点が大きく関わっていることが示唆された。

このことを段階別に記述すると、次のような5段階の習得段階を挙げることができる。

- ・非能格動詞の受動文
- ・内発的文脈の非対格動詞(自他両用・自動詞のみ)の受動文
- ・外発的文脈の非対格動詞(自他両用の動詞)の受動文(turn, change, decrease, sink : 使役主とそれにより引き起こされる出来事との直接性の程度が強いと考えられる語彙)
- ・外発的文脈の非対格動詞(自他両用の動詞)の受動文(break, close, dry: 使役主とそれにより引き起こされる出来事の直接性の程度が弱いと考えられる語彙)
- ・外発的文脈の非対格動詞(自動詞のみ)の受動文

このように、文脈の影響を考慮に入れると、同じ非対格動詞でも習得段階をより細分化できることが分かった。本研究により、これまでの統語的分析では明らかに出来なかった非対格動詞の受動文の原因に対する説明が、認知的観点からの分析により解明できたとと言える。今後この点を指導の観点に取り入れることにより、有効な指導方法となりうると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

「英語非対格動詞の受身化の誤用における文脈の影響について」佐藤恭子
追手門学院大学『英語文化学会論集』第22号 2013年、pp. 11~30 (査読無)

「英語文法能力の習得実態調査 「能力記述文 (can-do statements)」の作成へ向けて」佐藤恭子
追手門学院大学学習支援・教育開発センター年報第3号 2013年、pp.21~28. (査読無)

[学会発表](計3件)

「学習発達段階を考慮した英語文法事項

配列の検討」佐藤恭子(単独発表)
大学教育研究フォーラム 第 20 回大会
2014 年 3 月 18 日(京都大学)

「文脈における使役主(原因)の存在と
非対格動詞の受身化の関係について」
佐藤恭子(単独発表)関西英語語法文法研
究会第 27 回例会(関西学院大学)2013 年
12 月 14 日

「英語非対格動詞の受身化の誤用につい
て」佐藤恭子(単独発表) 外国語教育メ
ディア学会(LET) 第 53 回全国研究大会(文
京学院大学) 2013 年 8 月 9 日

〔図書〕(計 1 件)

『非対格動詞の受動化の誤用はなぜ起こる
のか—*An accident was happened.をめぐ
って—』佐藤恭子 溪水社 73 ページ 2015
年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 恭子 (Sato, Yasuko)
追手門学院大学・国際教養学部・教授
研究者番号: 30205976